

平成十六年度 上代文学関係卒業論文要旨・修士論文題目

(五十音順)

卒業論文要旨

万葉歌の耽美表現

——平十八年の雪歌群と家持歌——

安藤 公美

『万葉集』の巻十七と巻二十は家持の歌日記といわれている。その末四巻の実質的冒頭に、天平十八年正月の雪の日の肆宴歌群が置かれている。元正天皇の御在所で催された即興の肆宴での応詔肆宴歌群である。前年の天平十七年正月に従五位下に昇った家持にとって、この肆宴に列席したことが後の肆宴歌に多大な影響を与えていると言えるであろう。そこで、天平十八年正月の応詔肆宴歌群の家持歌を中心に、家持の残した多くの雪歌の諸相を確認検証し、家持が応詔肆宴歌群をどのような作品にしたかを考察した。

従来、天皇讚歌であると解釈されてきた家持歌だが、末四巻中の家持の雪歌を見ると、その意味を持つだけでなく、基本形の讚歌に加え、「雪」を景として詠んでいると考えることが出来た。それは、景を詠むことによって、上皇讚美を果たしているとも言えるのである。そして、家持の雪の歌世界には越中守時代の雪歌のように宴の雅な世界があり、「雪」を特別な歌材として扱っている。そのような歌を後に詠むことが出来たということは、天平十八年正月

の時点で既に家持の中に独自の雪世界が存在し、その資質を持つ歌人であったとすることが出来る。

さらに家持は中国文学を教養として取り入れ、それらを融合し、「賀」という世界だけでなく「雅」という世界を「白雪」という語に含め、与えられた「雪」というテーマの中で、新しい讚歌を作り出したと考えられる。

そして家持は、題詞・左注を付け、歌群という形にし、末四巻中の雪歌の先駆をなす作品としたと考えた。

万葉集の贈答歌

——桜井王と聖武天皇を中心に——

井口 純子

『万葉集』巻八の秋相聞の部に桜井王と聖武天皇との贈答歌が収められている。二人は天武天皇を曾祖父に持つ、またいとこの関係であるが、このような親しげな贈答が出来たのは何故なのか、どうしてこのような贈答歌が残されているのだろうか、はっきりしていないことが多い。本稿ではこの二首を当該歌とし、それぞれの和歌の技巧を読み取った上で、天皇と王の関係や立場、この贈答にどのような思いを込めていたのかについて、集中の他の贈答歌とも見比べながら、検証した。